

昨年12月9日にオンラインにて講演会を開催いたしました。今年度の小P連は、『コロナ禍を生きる子どもたちの実情と変化』をテーマに掲げ、10月の市長教育長懇談会では市長・教育長と意見を交わしました。そこで湧いてきたのが、学校現場でのリアルな子どもたちの姿や変化を知りたいという素朴な思いです。そこで今年度の講演会では、多摩市立小学校の校長先生3名をお招きし、学校での子どもたちの様子や教育現場でどのように子どもたちを支えてくださっているかといった話を赤裸々にお聞きしました。文字数が多く読みづらい紙面ですが、保護者の皆様にお知らせしたい内容が詰まっておりますので是非ご一読頂き、お子さんを支えるヒントにして頂けると幸いです。

講演① 「コロナ禍の教育活動の現状と今後について」

永山小学校 小島徹校長先生

* コロナウイルスの蔓延、突然の休校、休校が明けて・・・

2019年度冬、3学期のまとめの教育活動を進めている時期での突然の休校。急遽とりやめや延期になったものもあり教育現場でも不安と戸惑いが大きいものでした。休校が明け、子どもたちが学校に戻ってきた時、学校ってやっぱり大事な、学校生活が子どもたちにとって大きな意味を持っていることを改めて強く自覚しました。時差登校や35分授業、2学期制、夏休み短縮などこれまでと大きく変わりがなくなった教育活動も多かったのですが、我慢と辛抱の中で子どもたちが前を向いて頑張ろうとする姿をたくさん見ることができました。できないことはできないではなく、代替えとしてできることはないか？ということ自分たちで考える場面もありました。永山小では、6年生全員が作成した「提案書」を校長のところに持ってきました。校長と6年生が話し合い、できなくなった移動教室の代わりにお楽しみ会を子どもたちが主体的に開催することができました。どうしたらできるようになるかアイデアを出し合う姿が印象的でした。これまで2年間、多摩市の学校では大規模なクラスターはありませんでした。今こうして教育活動ができてるのは保護者の方々の絶え間ない努力のおかげです。とても感謝しております。

* 子どもたちと教職員のいのちと健康を守る

これは多摩市の教育活動の中で、教育委員会と校長会が一番最優先にしていることです。このスタンスは今も変わっていません。もう一つ大切にしていることは「学びをとめない」こと。感染状況を注視しながら教育委員会とどうすれば学びを進められるかという視点で尽力してきました。全校で一律に対応するものもあれば各校で検討、決定していくものもあります。学校間で対応が異なることもあり、保護者の方に心配、不安、不満を抱かせてしまうこともあります。ただ、どの学校においても「いのちと健康を守るための取り組み」そして「学びを止めないための取り組み」のどちらも大切にしながらギリギリまでの検討を重ねその上で判断をしたということをご理解いただきたいです。今年度に入り、45分間授業に戻りました。日々の授業はもちろん、授業以外では、例えば特別活動等をどのように行なっていくか、ということについて感染状況を見ながら教育委員会と協議をし、アイデアを出し合いながら進めています。一律に何かを決めていくということではなく感染状況に応じながら「どうすればできるか」を基本のスタンスとして実施できる方向性を見出しながら進めているところです。子どもたちの思い、保護者の方々の思いや考えに触れ、共有しながら学校として判断していくことを全校で心がけるようにしており、今年度の取り組みの柱としています。

* 基本的な感染症対策を徹底しながら・・・

アウトドア参観や授業のオンライン配信など各校それぞれ様々に工夫して行なっています。保護者の皆様に満足いただけるようなものにならないこともありますが、一つ一つクリアしながら行なっている状況です。基本的には感染症対策を徹底していくことで、教育活動を広げていくことができると、教職員に伝えていきます。いのちと健康を守るということ意識していくことは大切ですが、こういう機会に子どもたちの中にもこのような意識をもち、行動力を育んで行くことが大切です。これからの時代を生きていく上でウイルスとの戦い、異常気象、災害への対応など繰り返し子どもたちは出会っていきます。生活のリズムや自分自身の抵抗力、免疫力を高める取り組みに努力をすること、健康管理をしていく価値を知らせること、行動スキルを学ばせていくことも学校教育の重要な責務であると思っています。引き続き子どもたちの生きる力を高めていくための教育を続けていきたいです。来年以降ももうしばらくこの状況が続いていくと考えますが、この2年間培ってきた知見、様々な対応への創意工夫は私たちの力となっていると信じています。保護者の皆様と歩んできたということは校長の大きな支えとなっています。引き続きお力添えがいただけるとありがたいです。

* 結びに

令和4年度から多摩市の全ての小学校がコミュニティ・スクールになります。なおいっそうの協力体制を組みながら学校運営を進めていきたいです。また、特別支援教育の充実が求められています。多摩市は自閉症や情緒障害などのお子さんに対して多様な学びができる都市です。一人ひとりの教育的なニーズに合わせた教育を進めるために特別支援教育を進めていくので、ぜひ関心を持ってほしいです。

講演② 「ICT機器の活用の現状とオンライン授業について」

連光寺小学校 関口寿也校長先生

*なぜICT機器が一斉に配備されたか

国によるGIGAスクール構想というものがあります。これは、小・中・高校生に一人1台ICT端末を配備しようとする国の構想で、2019年から2024年の5年間の猶予の中で国費(一部を国からの補助金で賄う)を使用し各自治体で端末を配備させましょうというものでした。ところが予想外のコロナ禍があり、国は2020年(GIGAスクール2年目)までに配備をしないと国費を出しませんというスタンスに姿勢を変えたのです。そのため慌てて全国の自治体が昨年度末までにICT端末を購入して配備したという経緯があります。大きな変化に対しては、本来ならばじっくりと構想を練り、準備をするものですが、十分な構想・準備期間を取る間もなくとにかく導入という流れになりました。そのような背景があり学校間の差が当初現れました。

*多摩市でのICT機器の配備、実際の活用方法

多摩市では一人1台端末の他、各教室に1台のプロジェクター、Wi-Fiの強化(各教室に1台)を国費から賄いました。どんな機種をいれるかは、自治体ごとの選定となるので自治体によって差になって現れてしまうのが現状です。多摩市が選んだ機種はiPadです。コストは高いが電池の持続性と操作の簡易性をみて子どもたちに適しているとみて選定されました。電池は、朝保管庫から出して夕方保管庫に戻す時にだいたい残りの充電は50~60%ほど。余裕を持って日々使えることはありがたいことです。朝登校したら保管庫から端末を取り出して机の中に戻すというのが学習準備の流れになっています。全ての授業で使っているわけではありませんがほとんどの授業で使っています。低学年のうちには入力に時間がかかることもありますが平仮名やカタカナを覚えていくために時間がかかってでも入力させることも大事であることが分かりました。入力の仕方は、5,6年生は半数以上がフリック入力。1~4年生はキーボード入力(いずれもかな入力)で行なっています。

*メリット・デメリット

【メリット】

- ・iPadに意見を書く→先生に送る→全員の意見をスクリーンに映すことで、発表ができない子も先生に意見を送ることができ授業の全員参加率が上がった。
- ・学習活動の共有、整理、分類が非常に容易になった。「私と同じ意見だ」、「同じ図形だ」・・・ということが一目で分かり、それを仲間ごとに簡単に整理、分類したりすることができる。
- ・写真や図や表の共有が容易になった。特に写真。アサガオの観察など、これまではスケッチして見比べていたが写真がすぐに撮れることで何が違っているか・・・を考えやすくなった。
- ・グループで発表するのに時間がかからない。グループで一つの文章にみんなでアクセスできるので同時に発表の原稿を作ることができる。今までの3分の1くらいの時間で発表の準備をすることができるようになった。
- ・データが簡単に保存できる。1ヶ月前にまとめたものをスッと出すことができる。
- ・書くこと話すこと集中力を持続することが苦手な子がとても集中して取り組むようになった。ICT機器の力の大きさを痛感しており意欲の維持にてきめんの効果を感じている。
- ・iPadはノート代わりくらいとは思っていませんでしたが、ノート以上に重宝するツールになっています。書く、考える、友だちとディスカッションするということを疎かにするのではなく場面場面に応じて何が必要なかを見極めながら取捨選択しながら使っているというのが現状です。

【デメリット】

- ・1台10万円する学習器具をもつことが当たり前になっている子どもたち・・・いいの？そんなにすごいものを子どものうちから持たせて・・・という根源的疑問。
- ・破損が度々起こる。破損は昇降口、観察する時にバッグから出す時など移動する時によく起こるので未然に防げるよう教員が工夫をしている。
- ・見えないところでの活動への懸念。子ども同士のメッセージのやりとりがいじめの温床になっていないか・・・。連光寺小では持ち帰りをさせておらず、担任が1週間に数回、iPadの中身を確認している。持ち帰りをして、家庭で見えない活動の管理をするということは難しいだろうと考えている。ネットリテラシー、ネットモラルは学校でも指導するが、指導したからと言って指導したとおりにできないのが子ども。持ち帰りに関しては時期を見ているという段階。
- ・4~5年後の買い替えの問題。今回のものは国費で賄えたが今後買い替えの時期は自治体で全てを賄うのは厳しい可能性がある。各家庭に入学時に負担してもらうということが出てくるかもしれない。

*オンライン授業について

家庭で設定不備により接続できなかった場合、対処はご家庭にお任せするというスタンスにしました。(連光寺小の場合)オンライン授業やオンライン保護者会などを行なうとなると家庭にもICTスキルが必要になってきます。小学生のオンライン授業は生配信が適していると思います。中学校は学習が主であるので授業オンデマンド(録画された授業を子どもたちが選んで観る)をやっているところもありますが、小学校は生活実態がベース。子どもたちのディスカッションを進めていく事が多いので生配信が小学生に合っています。実際にやってみると見づらい、分かりづらいなどトラブルがあると思いますがそんなときはぜひ、声に出して教員に伝えてほしいです。3年生以下に関しては、保護者が横についていないと厳しいと感じています。保護者が補助しないと理解が難しい場面があるようです。いずれにしても一斉休校になったらオンライン授業をやる方向で学校は準備を進めています。学校による違いもありますが教員への研修がほぼないままスタートしているので、ICTに慣れた教員もいればそうでない教員もいます。地域性や教員の数の違いなどもありスタート時点での対応の違いや差が生じてしまったのが現状です。今は学校間での情報共有、情報交換をしながら足並みが揃ってきました。

講演③ 「コロナ禍における子どもたちの変化 ～心技体的な観点より～」

多摩第二小学校 吉田正行校長先生

* コロナ禍での子どもたちの現状と変化

※国立成育医療センターが実施したアンケートの資料を参考に

コロナ禍となり2年。生活の変化を余儀なくされマスクの着用、ソーシャルディスタンス、黙食など疑問を持つ余地もなく進められてきました。学年末になるにつれて子どもたちのストレス、イライラ、不安、無気力、うつ状態は増える傾向にあります。コロナ前と今とでは生活の様々な面で変化が見られています。就寝時間では、小1から小3までの児童の約20%が就寝時間が遅くなり、小学校高学年以上の3割に遅れや乱れが見られています。生活リズムが乱れてくるので余計にイライラや閉塞感を感じるようになります。スクリーンタイム(勉強以外でテレビ・ゲーム・スマホの画面を見ていた時間)では4割以上の子どもたちに1時間以上の増加が見られます。これは外で遊ぶ時間が減ったということに繋がります。食習慣では4人に1人は間食の機会や量が増えています。休校の影響で食事の時間がずれたり間食が増えたりしたことが原因です。対人関係では、約半数が先生や大人に話しかけにくくなったと回答しています。これは学校に行く時間が少なかった分、関わる時間も減ってしまったことが要因として考えられます。

* 子どもたちの声(アンケートから抜粋)とストレス症状

- ・黙食のため友だちと話せなくなって、話すと注意を受けてしまうので嫌だ(小4男児)
- ・コロナになって、悪口や差別を受けている人がいるのでは・・・と心配(小5男児)
- ・何でも「コロナだから」ばかりで自分の行動や気持ちを制限されているように感じた大人は大人でいろいろ大変なのかなあと思うと相談しづらい。みんな笑っているときも心のなかではイライラしている(小6女児)

【ストレス症状と頻度】

コロナのことを考えると嫌だー	42%	最近集中できないー	32%
すぐにイライラしてしまうー	37%	寝付けない、夜に目が覚めるー	24%
ひとりぼっちだと感じるー	16%	自分や家族を傷つけてしまうー	20%

7割超が何らかのストレス症状を抱えています。

コロナ禍では子どもたちの心の健康への影響が世界中でも指摘されています。

* SOSのサインと対応

子どもは自分の気持ちを客観的に観ることが難しいのでイライラや不安に気づいたり収めたりする力も不十分です。そんな時に大人は気持ちを共感する、イライラする気持ちを言葉で代弁する、落ち着ける場所を確保する(一人になれる空間を与えるなど)といった配慮が必要です。子どもが無気力な場合は、無理をさせないようにする、十分に休養をとる、周りが焦らない、残念な気持ち、悲しい気持ちに共感してあげる、今できることを一緒に探してあげる、うつ症状がないかどうかを専門家に相談する、といった手立てがあります。登校渋り、不登校気味な場合は、理由を丁寧に探り、無理に登校させない、周りが焦らない、プレッシャーをかけない、回復するための休養であることを理解することが大切です。保護者と学校が連携しながら段階的な方法を試してみるのがよいでしょう。背景に体の病気がないかを見極め、必要によっては受診することも大切です。子どもが気持ちを話せるように聞いてあげる、話し始めたら聞き手に回って、話してくれたことについて労いの言葉をかけてあげましょう。

* ケアの方法、留意点

子どもが対応できる精神的なキャパシティのラインは子によってそれぞれです。周囲からのサポートやストレスそのものをなくしていく、早めに気づいてケアをする、医療や福祉と連携することでキャパのラインをあげてあげるようにしましょう。今、子どもたちは自然との原体験、人とふれあう原体験が、とても減っています。できる範囲で野外活動を増やしたり自然体験を増やしたり五感を使った原体験を多くさせることが必要です。公園を巡る、川沿いを歩くなどといったことで子どもたちの心は癒やされます。体験や体験学習の意義がとても重要になってきています。また、豊かなコミュニケーションのために人と人との関わり、人とふれあう原体験も大切です。家族、祖父母、親戚に会える機会を少しずつ増やしていけるとよいです。なぜなら安心できる大人、真剣に話を聞いてくれる大人の存在が子どもの心の回復に必要なからです。子どもたちは弱いものではなく、本来は強いものです。その力を信頼していくということも必要であり、必要以上に大人が神経質にならないことが大切です。コロナ禍はマイナスなことばかりではなくプラスなこともあったということを意識づけていくようにしましょう。長引く感染対策に大人も疲れています。生活の変化、家族のケアなど、一人で抱えないで皆で共有する、自分自身をケアしていくリラックスしていくことが大事でありそれが子どもに還っていくのです。二小では、全家庭にひまわりの苗を配りみんなで育てたり、二小のキャラクターを作り子どもたちを応援したりなどしています。子どもも大人も元気に明るくこの苦難を乗り越えていきましょう。

質疑応答

Q.子どもを支えるには周囲の大人が元気であることが大切ですが、現場の先生方はどうでしょうか？

- A. エンジン全開で頑張っています。子どもたちのために何ができるだろうと常に自問自答しながら取り組んでいます。教員の働き方改革と言いながらも実際はやらなければならないことを減らしてあげられない実情もあるが、ICT化のおかげで少しずつ負担が減るような形を見出しているところです。(小島先生)
- ・紙文書をできるだけ印刷しない、18時以降の電話対応はしないなど小さいところを軽減しているところです。タブレットによる授業が始まったばかりなので教員の気力と関心が今は続くが、慣れてきたところが心配です。どこで息を抜くか・・を工夫して、教員も子どももやる時はやる、休む時は休む！と、メリハリをつけながら教育活動ができるとよいと考えています。(關口先生)
 - ・授業の準備、保護者の方の対応など教員の業務は山盛りです。校長は教員のSOSを見逃さないように日々過ごしています。朝の出勤の様子、教室での様子を見て、あまり追い詰められていないかをみえています。子どもたちの前で最前線を行ってくださっている教員が明るくないと子どもたちのSOSも見抜けません。(吉田先生)

Q.保健室やスクールカウンセラーの利用率はコロナ禍以前に比べて増えていますか？

- A. 保健室の利用率は増えていると感じています。スクールカウンセラーもほぼ予約で埋まっています。不安感、悩みを聞いてもらいたいというニーズがあります。保護者の方の利用も多いです。(小島先生)
- ・スクールカウンセラーは保護者のカウンセリングの時間が少し減っています。担任が気にかかる子どもを積極的に送ってカウンセリングを勧めて話を聞いてもらうように活用しています。(關口先生)
 - ・保健室で癒やされ、ゲームをしたりぬいぐるみを触ったりして気持ちが復活して教室に戻っていく子どもが多いので、拠り所になっているのは事実です。(吉田先生)

Q.コロナ禍になってから子どもの弱ってきていると感じる部分はどんなところでしょうか？

- A. 「最後までやりきる力」が足りなくなってきたと感じます。そういう場が少なくなっているからその部分を伸ばしていきたいです。コロナ禍がきっかけで多様な学び方が広がり、オンラインでしか見られないこと、知り得ないことなど、得るものも大きかったです。足りないところばかりを追求していると、子どもたちにもコロナが悪い影響ばかりが記憶に残ってしまうのでプラスになった面も伝えてほしいです。悩みがコロナによるものか、思春期によるものなのか、判断は難しいが、子どもたちはコロナ禍を抜け出したあの方が長く生きていくのでこれからのいい豊かな体験で、今の不安な状況を緩和していくことが大切だと考えます。(吉田先生)
- ・気になる子どもの言動で「どうせ・・」という言葉がよく聞かれます。子どもたちの期待感の低下が気になります。期待感を持って、目標を持って前に進んでいく姿を求めています。子どもたちの期待感、それを支える安心感をどう作っていくかが大切だと考えています。(小島先生)

Q.黙食が辛い、給食の時間が一番辛いという声が子どもから聞かれています。他の学校での残食状況、給食の間にされている工夫はどのようなもののでしょうか？

- A. 黙食は徹底してやらざるを得ないことと捉えています。4つの壁を向いて子どもが背中合わせになって食べている学校もあります。給食の放送は、流行りの曲だと歌いだしてしまうので連小ではクラシックを流すなど喋らなくて済むような対策をしています。給食の時間を一番心配し、別室で食べているお子さんもいるというのが現状です。残食は多いですが、一方で集中して食べられているお子さんもいます。ご理解ください。(關口先生)

Q.感染対策はいましばらく続くとおったが、具体的なゴールの基準はありますか？

- A. 明言は難しいですが感染者数の数、治療薬の確立、これまでにある病気と同等の扱いができるということではないでしょうか。今年度はこのような状況が続きますが来年度4月1日から全て解除とは考えにくいです。来年度の途中でどのような変化があるかがポイントです。子どもたちの育ちをトータルで支えることが必要となってきます。黙食で辛い思いをしたのなら他の部分でカバーしたり寄り添ってあげたりして対応していくとよいかと思えます。(小島先生)